

第1章 呑川の本流・支流の流れ

1. 呑川 の 概 要

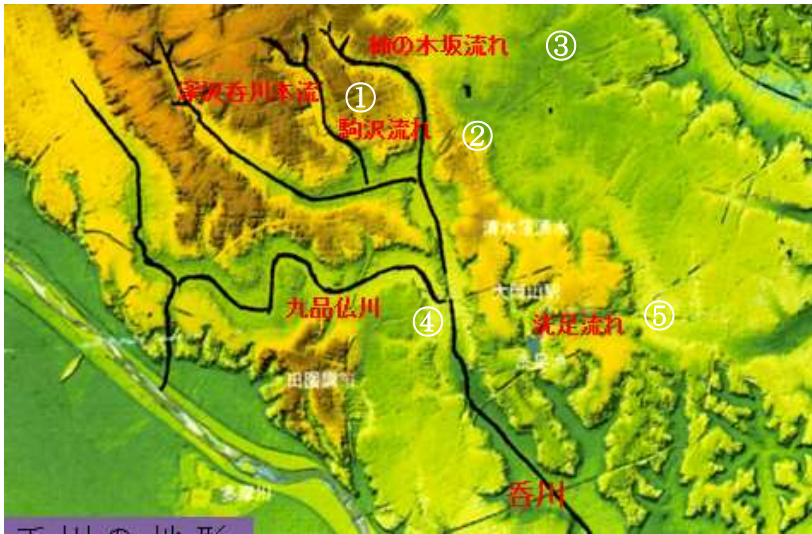
奥多摩方面から山々を削って流れてきた**多摩川**が、青梅を扇頂として南東方向に緩やかに傾斜する武蔵野台地という大きな扇状地を造りました。東京の河川は標高 50m 付近の湧水源の三宝寺池・善福寺池・井の頭池等を源流とする荒川支流の①**新河岸川**、②**石神井川**、③**神田川**、標高 30m 付近を源流とする城南 3 河川の ④**渋谷川**古川、⑤**目黒川**、⑥**呑川**の 6 河川が流れています。



川 名	距 離	流域面積	源 流	終 末
① 新河岸川	34.6 km	411.0 km ²	川 越 市	北 区・荒 川
② 石神井川	25.2	61.6	小金井市	北 区・隅田川
③ 神 田 川	25.5	102.3	三 鷹 市	中央区・隅田川
④ 渋谷川・古川	7.0	22.8	新 宿 区	港 区・東京湾
⑤ 目 黒 川	19.5	45.8	世田谷区	品川区・京浜運河
⑥ 呑 川	14.4	17.5	世田谷区	大田区・海老取川

呑川**の主な源流**は5本の流れがあり、流れの谷を形成しています。

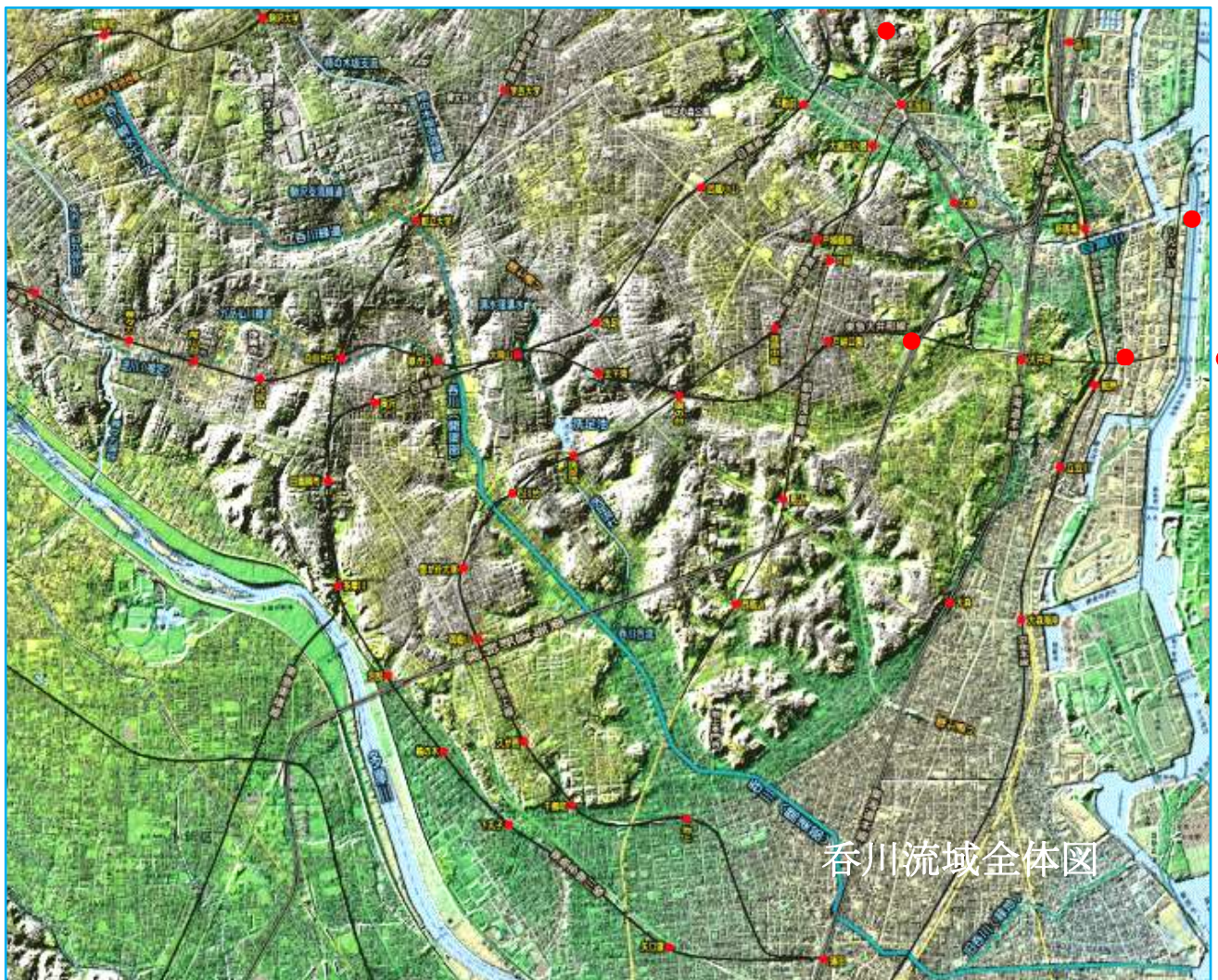
① 東急田園都市線・桜新町駅付近を最源流とする呑川本流の「深沢流れ」、②駒沢オリンピック公園



付近を源流とする流れの「駒沢支流」、③環七通り近くの世田谷区と目黒区の区境付近から都立大学駅まで流れる「柿の木坂支流」、④東急大井町線・等々力駅付近から九品仏浄真寺を廻り、緑が丘駅付近まで流れる「九品仏川」、⑤大田区の清水窪弁財天池から洗足池付近を源流として、今も本村橋で呑川に流れる「洗足流れ」です。大田区に入り、

原台の間を池上本門寺付近まで流れ、

その先の多摩川沖積平野に江戸時代初期から六郷用水を合流して、水田の中を東京湾まで流れていました。洪水対策で1935(昭和10)年に京急蒲田駅の先から新呑川を開削し、真っすぐ海老取川に流路変更しました。その後、屈曲している旧呑川を埋め立て、1975(昭和50)年緑道にしました。





2. 呑川源流域の流れ

[呑川源流部 (世田谷・目黒区 現在の4本の旧河道・現緑道)]

(1) 世田谷区・桜新町付近源流部





東急田園都市線の桜新町駅付近が呑川の最源流部で、江戸時代（1,660年代）に品川用水が大山街道沿いに土手を築いて開削され、その漏水が源流の一部だった時もあります。しかし、この地域は昔から湧水が多い地域で桜新町一丁目 41 番地①を最源流とします。

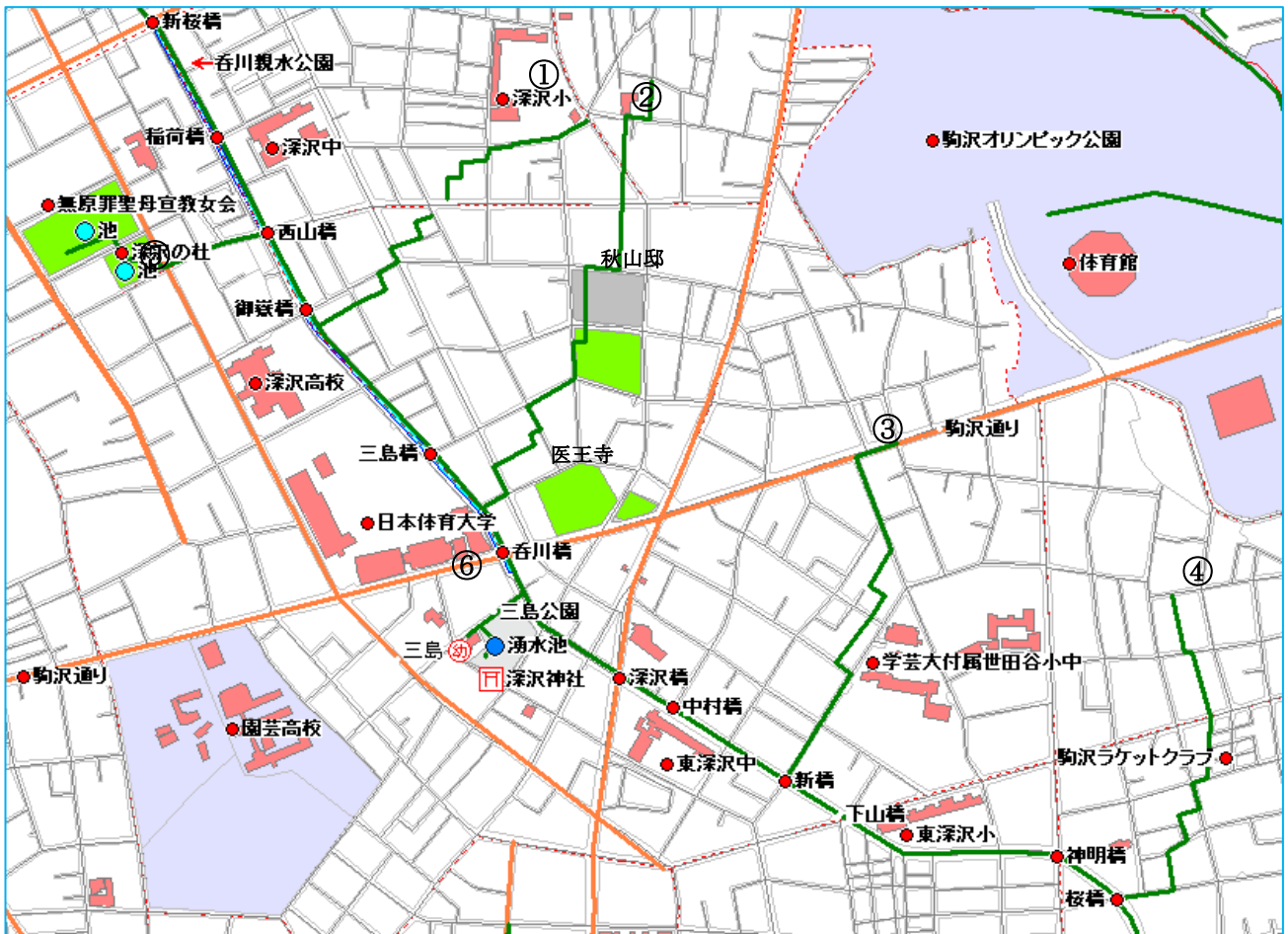
ここからサザエさん通りの交番前交差点(手前右岸にも流れ跡)まで、専用の細い流れの跡②が続いています。交番付近は戦前には蓮田で、戦後も良く洪水になったそうです。サザエさん通りを渡り細い流れ跡を辿ると桜新町一丁目 6 番地の突き当りの緑道が流れの分岐点③で、左に真っ直ぐ上ると桜新町駅となり、品川用水漏水の流れ（点線）がありました。

交番付近の蓮田(上保氏所蔵写真)



その途中の流れ跡の緑道が終わる所を右に曲がり④、住宅の間の細い流れ跡を、ゆるい勾配で上がって行った新町南公園下辺りも源流点の一つです。そして戻って緑道を南に向かうと、国道 246 号線に新櫻橋⑤が架かっていて、覗くと水の流れが見られ、国道を渡ると犬と鳥のモニュメントがある呑川親水公園が始まり、水面が見られます。

(2) 深沢流れ



① 呑川親水公園（呑川本流）

1972(昭和 47)年に呑川本流を緑道化した後、世田谷区が玉川通り新櫻橋から駒沢通り呑川橋まで約 1 キロ間に、雨水や湧水を貯水槽に貯え浄化してポンプで循環する復元水路を 1990(平成 2)年に造りました。この兩岸の緑道には桜の古木も多く残っていて、きれいな桜並木が川面を包み、水面にはカルガモ親子が泳いだりして、石橋や石畳の道が区民の憩いの場になっています。



② 深沢流れ左岸

深沢地区左岸には流れの跡が 4 本あります。深沢小学校①付近からの流れ跡は御嶽橋下流で流入し、特に駒沢公園近くの新町保育園付近からの流れ②は、水の流れを確認でき自然も豊富です。辿って行く



と深沢六丁目 10 番地で秋山邸の庭の池に入り、隣の畑を潤し、国会議員・小沢邸の真横を通り、日本体育大学付近で呑川の復元水路に流入しています。深沢四丁目の駒沢通りを越えた学芸大世田谷小学校近くの流れ跡③、深沢二丁目から一丁目小公園脇の共同洗い場跡碑を通り、駒八通りの先の駒沢ラケットクラブ横を流れた跡④も辿ると確認できます。

③ 深沢流れ右岸

春の桜・秋の紅葉シーズンの土日 2 週間だけ解放される深沢八丁目・「無原罪聖母宣教女会」の池の湧水は、隣の区立「深沢の杜緑地」湧水池⑤と一緒に流れ、今も近くの復元水路に流入しています。深沢五丁目・「深沢神社の池」（現三島幼稚園の場所にあった眼病祈願の池として有名）からの流れ跡（歩道）と、神社奥の湧水が三島公園の湧水池⑥に入った流れが合流して呑川に注いでいました。



(3) 駒沢支流 (流れ)

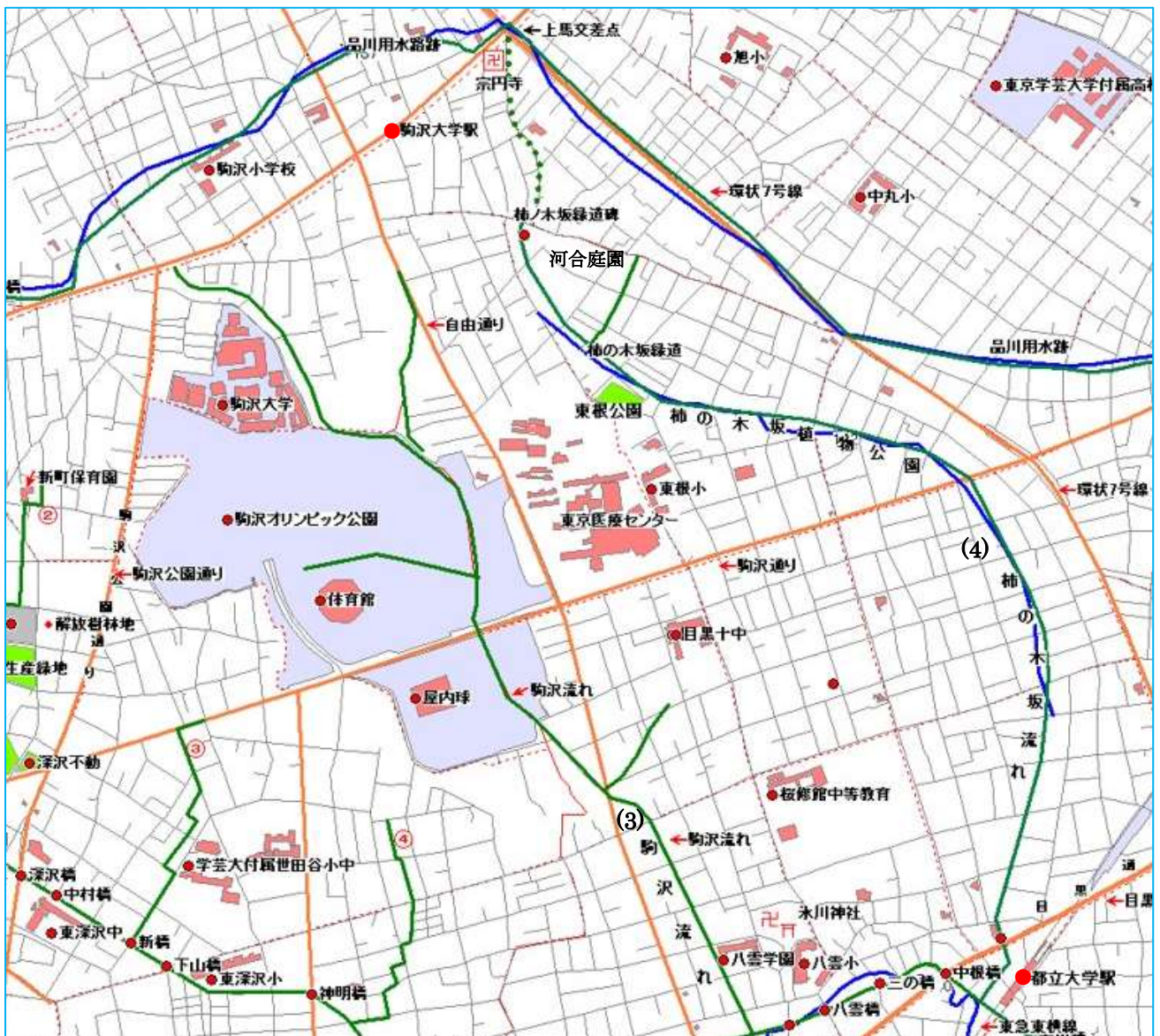
駒沢支流は、駒沢大学先の玉川通り付近を源流として付近の湧水を集め、駒沢公園内（駒沢ゴルフ場を1964(昭和39)年オリンピック開催で埋め立て、流れ跡は世田谷区と目黒区の境）をくねくねと通り抜け、公園の先から目黒区の呑川駒沢支流緑道となって、氷川神社手前の目黒区八雲二丁目で呑川に合流する流れでした。



駒沢支流緑道



駒沢大学先源流



(4) 柿の木坂支流(流れ)

柿の木坂支流の源流は、環七通り近くの世田谷区と目黒区の区境付近に2カ所あり、本流は世田谷区上馬三丁目の宋圓寺付近から住宅街を流れ、目黒区東が丘1丁目に入り歩道が設置された道路の先から「呑川柿の木坂支流緑道」となります。枝垂れ桜の美しい河合庭園や自民党町村邸脇からの支流跡が、



屈曲した流路跡の芳窪街かど公園先で流入してきます。流れ跡

は東根公園の脇を通り、1980(昭和55)年に武蔵野の雑木や四季の花木約70種が植えられた緑道植物園として、1年中楽しく散歩できる快適な緑の散歩道となりました。今の東が丘という地名は東根と言われ、呑川の浸食できた台地の縁やひだを表し、泉が湧き人々が暮らしや

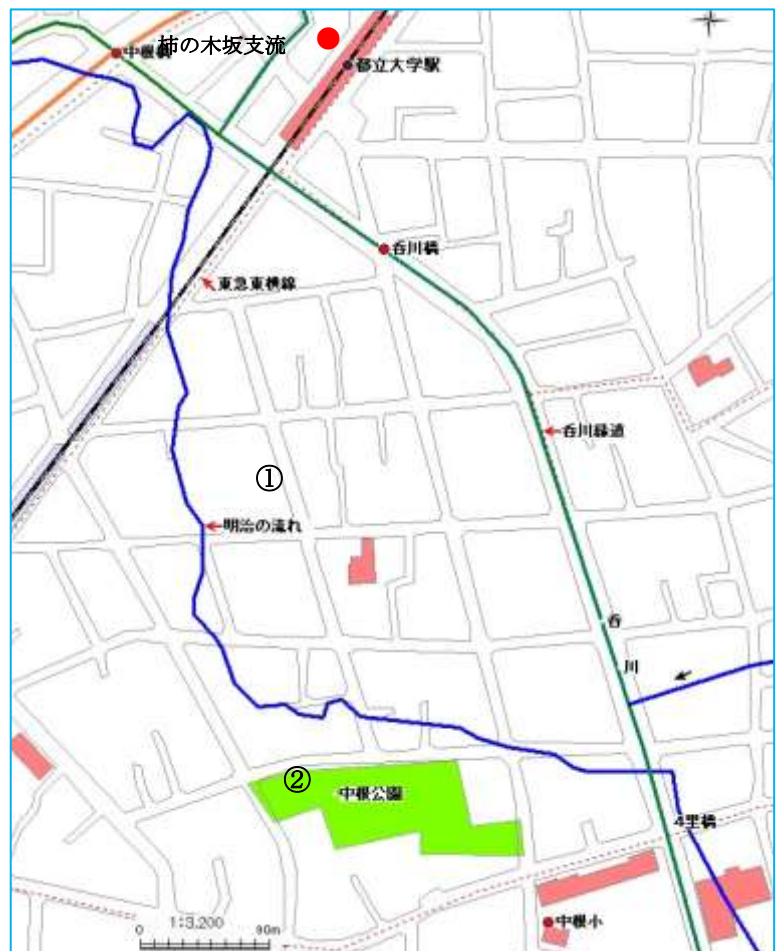
すい場所でした。緑道は目黒通り迄ですが、流れは通りを渡って都立大学駅付近で呑川へ合流していました。

(5) 都立大学付近・旧呑川流れ

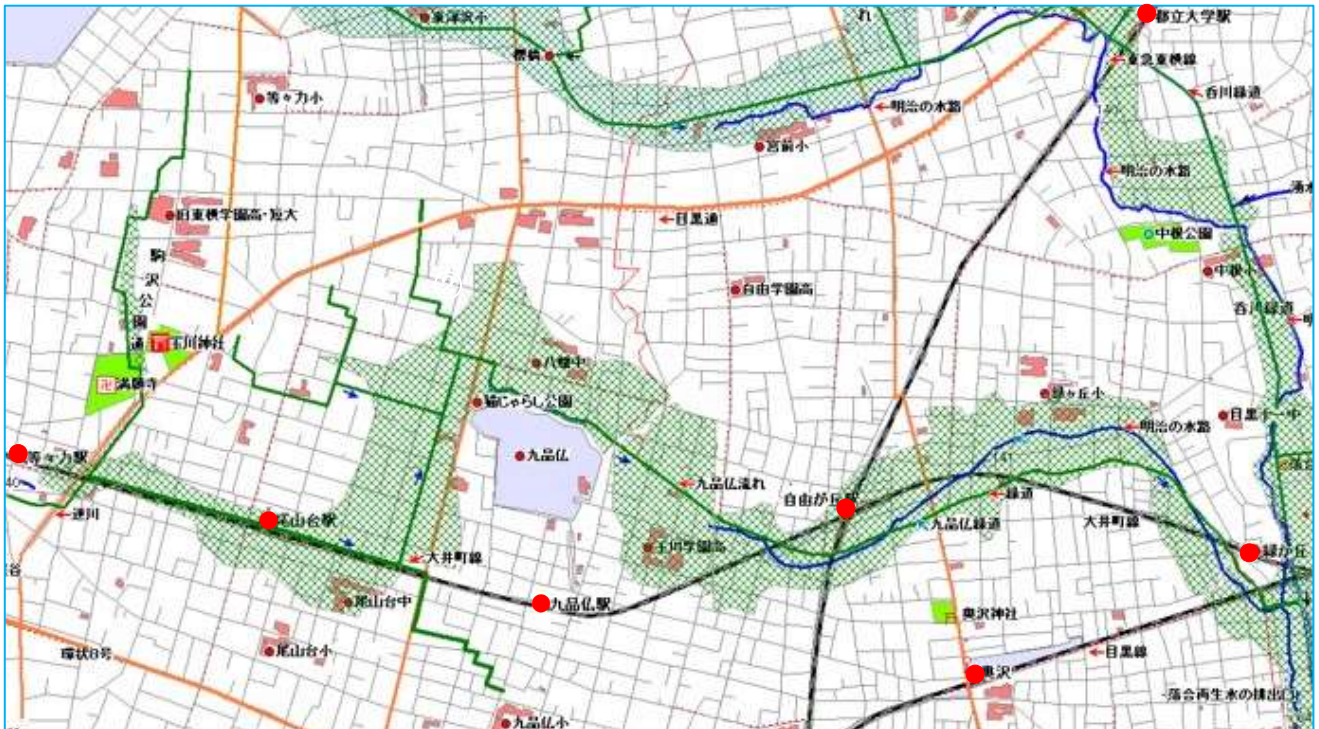
旧呑川流れは、柿の木坂支流が合流した所から右側の山裾を流れ、今も旧呑川流れからの湧水①の一部が見られます。そして突き当りの中根公園②下から、現



在の呑川緑道を越えて左側の山裾を流れていました。



(6) 九品仏川



いにしへの「九品仏川」は東急大井町線の等々力駅近くを流れる「逆川」から、砧公園と馬事公苑の間を流れ、世田谷通りを越えて桜ヶ丘三丁目付近を源流とする、現在の「谷沢川」と一体の長い川でした。それが河川争奪で谷沢川に「等々力溪谷」ができ、多摩川に流れ込み切り離されました。もし小さな谷沢川が、国分寺崖線からの多量の湧水による谷頭浸食をして九品仏川の水を奪わなければ、呑川の最源流は今の九品仏川となっていて、もっと水量豊富な川だったことでしょう。

九品仏川は等々力三丁目の満願寺方面からの流れ跡がある尾山台駅付近から東へ流れ、奥沢城跡・九品仏浄真寺の半島丘を半周して、「猫じゃらし公園」と続く低地の湧水の多い地域を流れ、世田谷区と目黒区区境となっている桜並木の緑道（1974(昭和 49)年暗渠化）を東急大井町線に沿って自由が丘駅前を

通り東流し、緑が丘駅先付近で呑川に合流していました。合流点付近に弁天社があり「水神橋」がありました。現在は桜並木の九品仏緑道となっています。



【九品仏川と谷沢川の関係】

(昔、

等々力付近の等々力溪谷から多摩川に流入する谷沢川との河川争奪流れ跡（逆川痕跡あり）

その後、

九品仏川は等々力付近から湧水豊富地帯の谷合の流れを集める川となり呑川に合流)



合流 水神橋
9 昭和 44 年頃

3. 呑川中流の流れ・支流



(1) 大岡山流れ

大岡山流れは、左岸の大岡山の丘から呑川に流①る2本の流れで、①は呑川緑道の目黒区平町1-21 駐車場脇から細い流れ跡を登って行くと、1-5番地まで辿れます。

②は大岡山児童遊園を谷頭（標高35m）とし、呑川まで300mを高さ15m位一気に下る「地下水の湧出による谷頭浸食」によってできた急峻な窪地へ湾曲した谷筋の流れ跡です。「ひょうたん池」の近辺を通り、



落合水再生センターからの高度処理水流入口付近の呑川に続いていました。

(2) 奥沢

流れ (1)

1950(昭和 25)年迄は「奥沢弁天池」が奥沢駅付近の奥沢銀座通り沿いにあり（弁天様は奥沢神社に移設された）噴出した湧水と上流からの湧水と合わせ、自由通りの城南信用金庫の駐車場の先からの源流（上流は銀座通りを横切って、くねくねとした流れ跡）も合流していました。自由通の奥沢三丁目 28 番地と 15 番地の細い道が流路跡で、途中の分岐点付近で両支流の貴重な流れを見られ、合流して奥沢公園の手前の歩道を通り、世田谷・目黒区境（旧呑川）、目黒・大田区境（奥沢流れ）を流れ島畑橋下流の石川町二丁目まで呑川に合流しています。



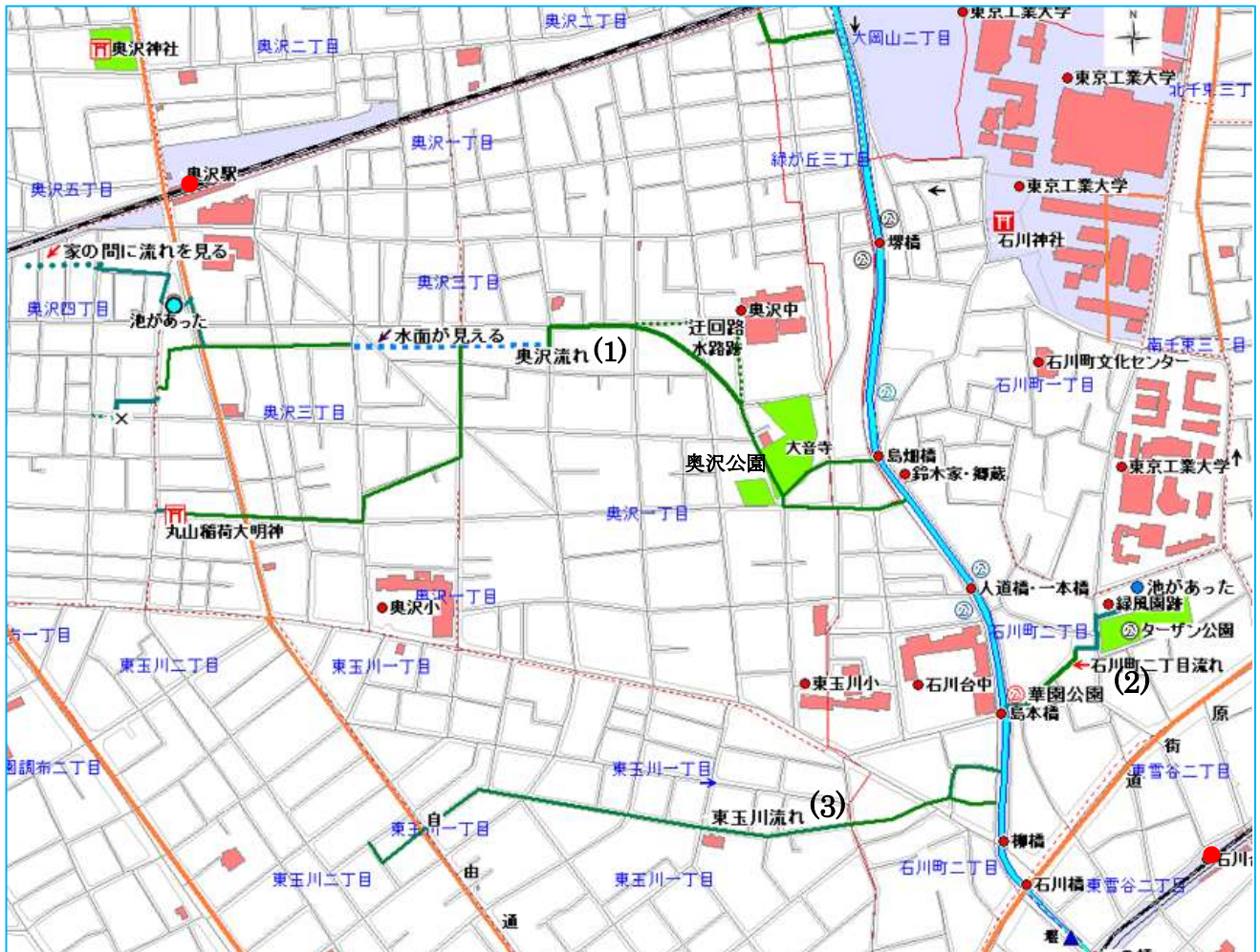
奥沢 3-22 水路



奥沢 1-31 水路



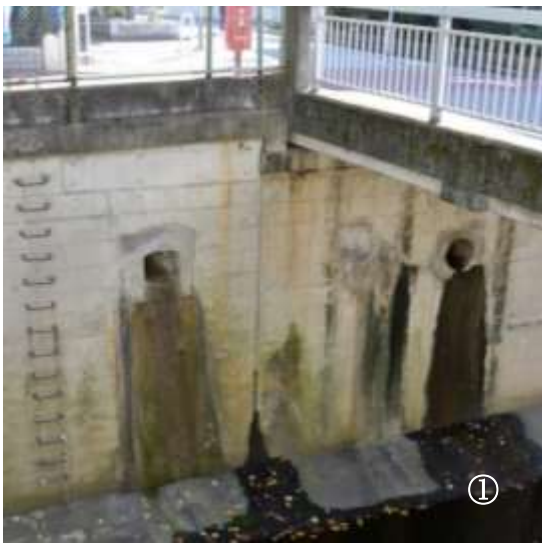
呑川流入口



(3) 石川町二丁目流れ(2)

呑川左岸の石川町二丁目・島本橋たもとに小さな四角い流出口①があります。その合流口の「リバーコミュニティはなぞの・華園児童公園」右端奥に水色のフェンス②があり、その先に流れ跡の暗渠を見ることができます。島本橋の道路沿いの呑川緑道軸(水道道路)を廻って次の路地から公園の先に見えた暗渠跡に入ると、曲がりくねりながら40m程続いています。

この先は民家裏のコンクリート蓋つきの側溝になっていて、狭くなり道路に出ます。その道路先の左側丘は、元(昭和40年代末1974年迄)緑風園という庭に池のある大きな料亭でしたが、現在は大きなマンションになっています。突き当りの丘の上に行くと「石川町二丁目児童(ターザン)公園」があり、



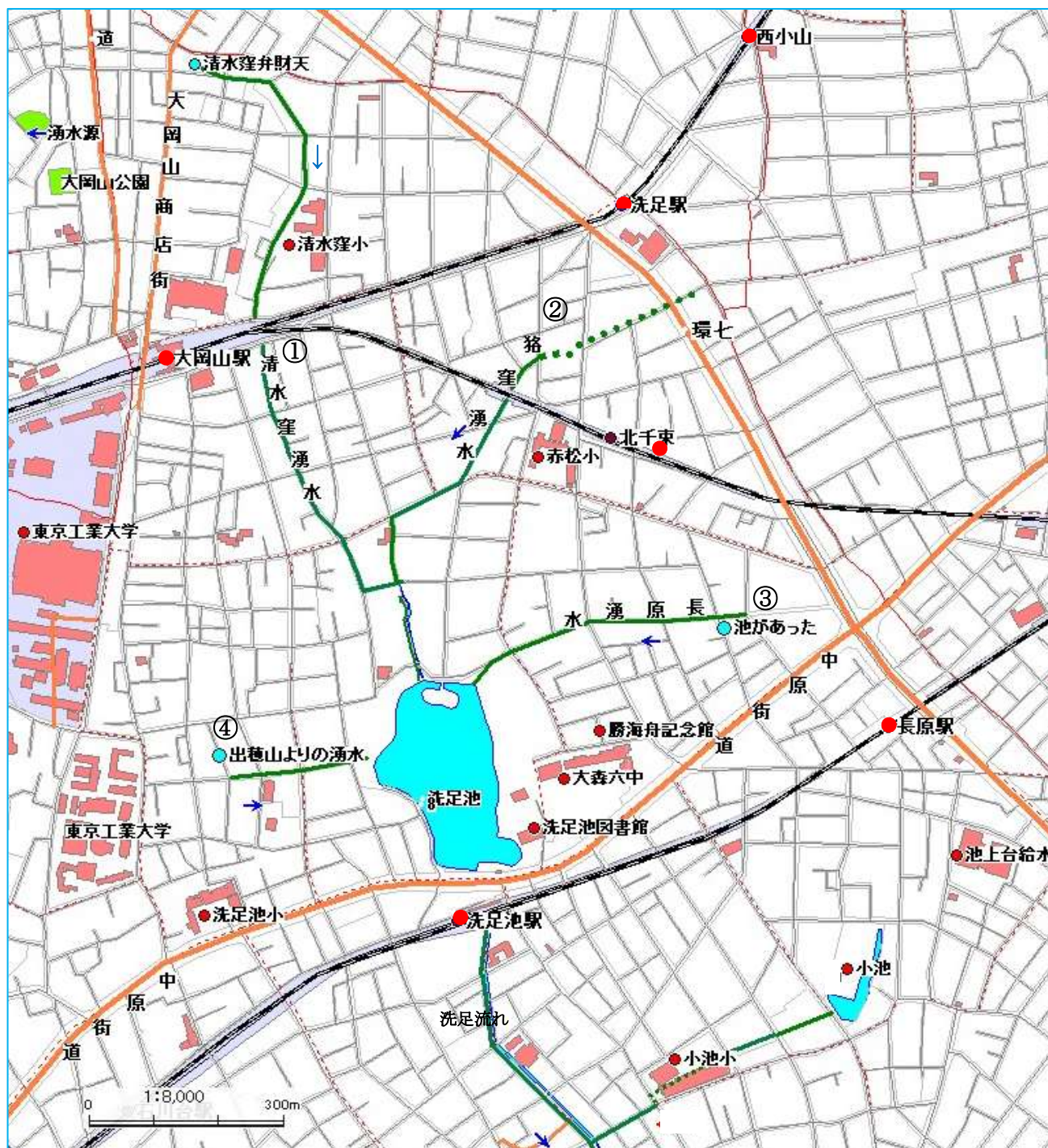
右側の緑風園跡との境が湧水源と思われます。また華園児童公園の暗渠通路の左ブロック塀に沿って、マンション敷地内に雨水用の側溝があり、それも合わさって呑川に流れ込んでいます。

(4) 東玉川流れ(3)

呑川沿いの「芝桜金太郎公園」脇の流れの開口部①と、少し下流の壁面に四角く塞いだ流れ跡の2つの流路があります。石川橋から奥沢方面への通りの手前で流路は一緒になり、道路を渡った所の古いフェンス②を通り抜け、住宅街の中の狭い専用流路跡を緩やかに登って行きます。突き当りのフェンスを出ると道路右側に片側歩道が続き、「東玉川地区会館」脇を通り、「東玉川神社」そばから自由通りを渡り、右に曲がり東玉川二丁目27番地③まで流れ跡を辿れます。



(5) 洗足流れ源流部



現在、呑川に流入している湧水流れで最大の流れは「洗足（千束）流れ」です。その源流の湧水は4か所から流れ出ていましたが、今は目黒区との区境の急峻な崖下にある北千束一丁目 26 番地の「東京の名湧水 57 選」に選ばれた清水窪弁財天の池からの湧水だけになりました。長さ約 20m の池の小島に弁財天が祀られ、現在は地下水を循環利用している滝の水が間欠的に落下しています。



この池からの流れが①「清水窪湧水」で、道路脇を暗渠で流れ、目黒線を潜って洗足池公園に入った、桜山下から



清水窪弁財天湧水池



洗足池に流入

きれいな水の流れを現し、「洗足池」に

流入しています。

②「貉窪(むじなくぼ)湧水」は、目黒線の洗足駅に近い北千東二丁目の北東端で、環七通り西側の窪地を谷頭とする谷から流れ出していました。北千東駅そばの大井町線

を潜りレンガ歩道を下ると稲荷坂道路脇にかつての流路跡が残されていて、その先の千東特別出張所の角を左折し、清水窪湧水と公園入口の桜山下で合流していた流れでした。



長原湧水跡

③「長原の湧水」は、品川区に近い南千東一丁目の中原街道と環七通りとの南千東交差点の北側台地下を谷頭として、道路左側のレンガ歩道を南千東東児童公園の脇を通り、池の北東の細い路地から洗足池の水生植物園辺りに流入していました。



④「出穂山(でぼやま)下湧水」は東工大付近の尾根下近くから洗足池の西側、千東八幡神社下の池月橋袂の、以前は洗足池だった窪地に流れ込んで

いた小さな谷の流れでした。突き当りの東工大の中に小さな出穂山神社があります。

また、1963(昭和 38)年の中原街道拡幅工事時に、洗足池畔の睡蓮が良く咲いていた所を工事で生じた残土で洗足池を埋立て、洗足池図書館が建てられました。

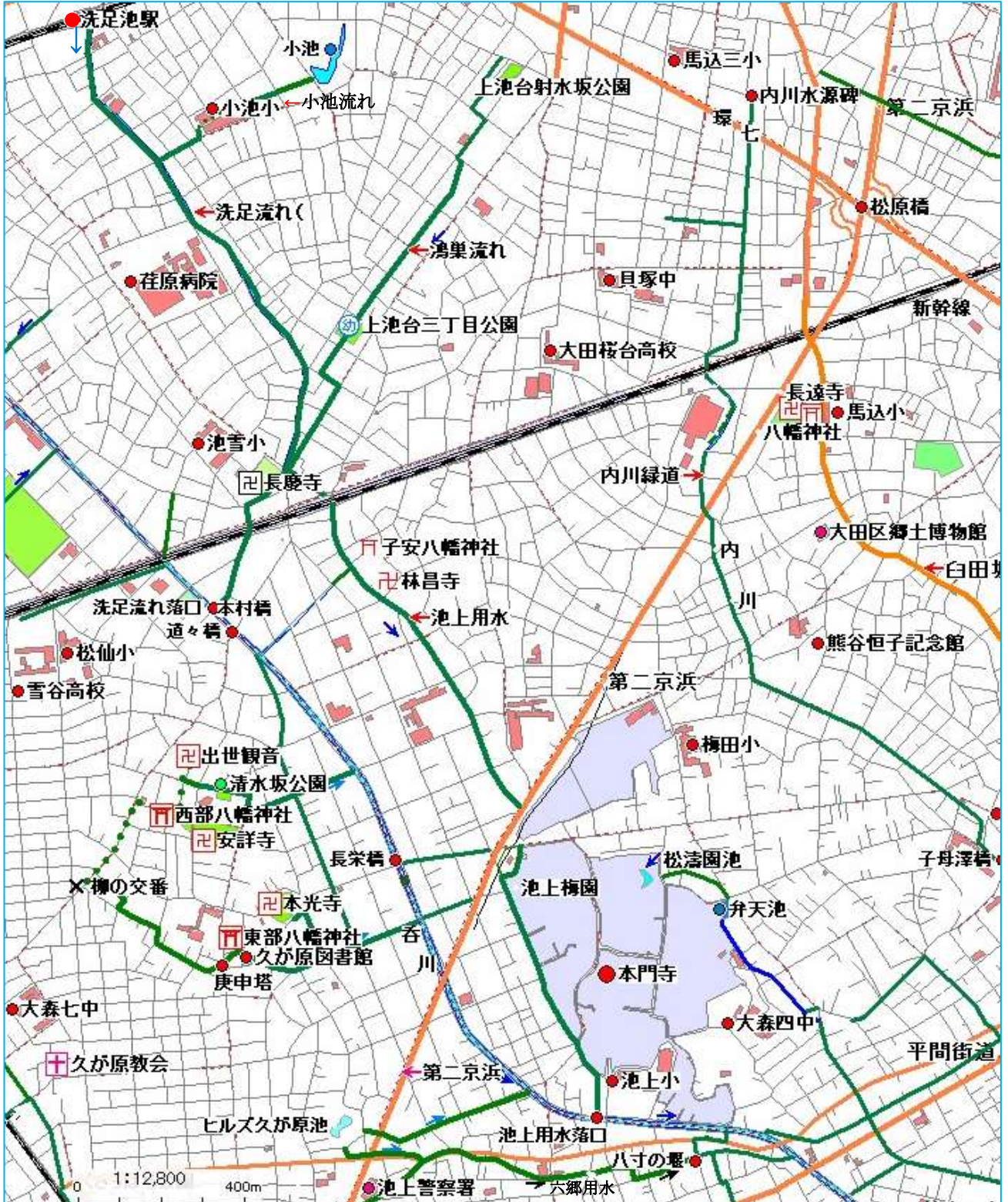


池月橋袂の窪地

(6) 洗足流れ (池上用水)

千束(洗足)池は、千束溜井として灌漑用水の目的でできました。中原街道が堤の役割をし、垵樋近く
に久が原村飛地と道々橋村飛地の8畝歩の堤や池床を固める土取り場がありました。

洗足(千束)流れは、千束溜井から流出した川幅 1.8m程の小川で、改修前の洗足流れは、今の流れの
倍以上の幅と水量がありました。台地の裾の各所から湧水が出ていて、水田や洗い場に利用されていま
した。当時の沿川の水田は、種籾の直播きによる摘み田でした。





「小池流れ」は、すり鉢の底にあたる溜池だった小池から流れ出て、小池小学校の中を通



り 500m 程先の小池橋で流入していました。小池は、池の谷頭方向の左右 4ヶ所から湧水が流れ込み、釣り堀から 2009 年に小池公園となり、池南端の水門から下水道に流れ出て (80l/分) います。

「鴻巣流れ」は、上池台射水坂

公園辺りを谷頭とする



湧水を水源として、鴻巣坂下の山裾から学研通りに平行する細い流れで付近の水田を潤し、上池台三丁目公園の中を流れ、洗足流れ (池上用水) に合流していました。

これらの流れを集めた「洗足流れ」は、本村橋付近の今の落口と桜並木道となっている「子安八幡」前経由・道々橋付近の 2ヶ所で呑川 (石川流れ) に流入していました。

「池上用水」は、分岐の先の JR 線ガード下から桜並木の歩道が続いている荏原台丘裾の林昌寺下を流れ、池上地区の田を潤し、池上梅園下から本門寺山裾を流れ、理境院



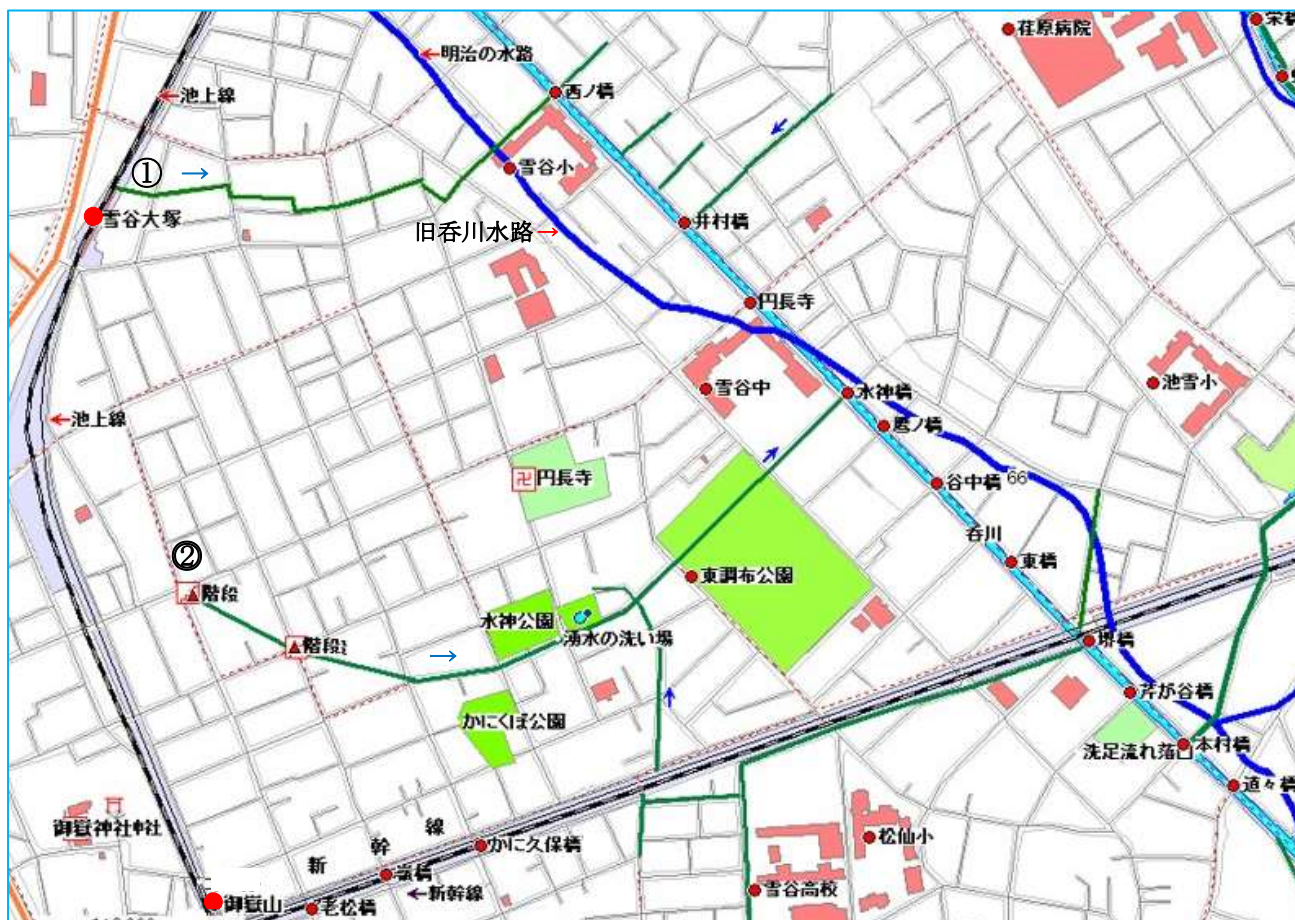
横から池上本門寺参道の本成院・中道院の裏手 (元川尻・西田邸内の広大な屋敷庭園の池を抜け) から霊山橋上流付近で呑川に流入していま

流れ
落口



した。

(7) 雪谷水神流れ



呑川右岸の雪谷地区で一番高い尾根を通る池上線の雪谷大塚駅付近から2本の流れ跡があります。

①は駅線路の傍から住宅の間の細い坂道を下り、雪谷小学校脇の歩道を通して「西ノ橋」から呑川への流れ跡。②は御嶽山駅との中間の四つ角（南雪谷四丁目16番地）から小さな階段を下る水路跡が鮮明に残ります。この流れは、昔から雪谷と嶺町地区の村の境となっている細い流れ跡で、湧水が今でも見られる「水神の森」に2014年にオープンした「水神公園」の横を流れ、洗い場復元からの流れと、次の四つ角で対面するJR線丘からの流れが合流していました。そこから緑豊かな「東調布公園」の水遊びができる復元水路を通り、「水神橋」下で呑川に流入しています。

またJR新幹線の南側の丘にある雪谷高校・松仙小学校の脇からも、線路に沿って湧水の流れが呑川に注いでいました。そして、この地区は雪谷左岸の荏原台からも多くの湧水流れ跡の四角いコンクリ穴埋め場所から、今でも大雨の後は数日水音がこだまして呑川に流れています。

(8) 久が原流れ



久が原流れは東京の最南端の丘から、今でも3ヵ所の湧水があります。①は久が原の尾根筋の「柳の交番」から坂を少し下り、左片側の歩道並木が流れ跡です。「久が原図書館」手前角の「庚申塔」から元農家の庭を通り、図書館からの緑道①を辿ると道路に突き当たり、右側片側歩道が流れ跡で、「本光寺」の水垢離場の湧水と洗い場跡からの流れを合わせ、「北

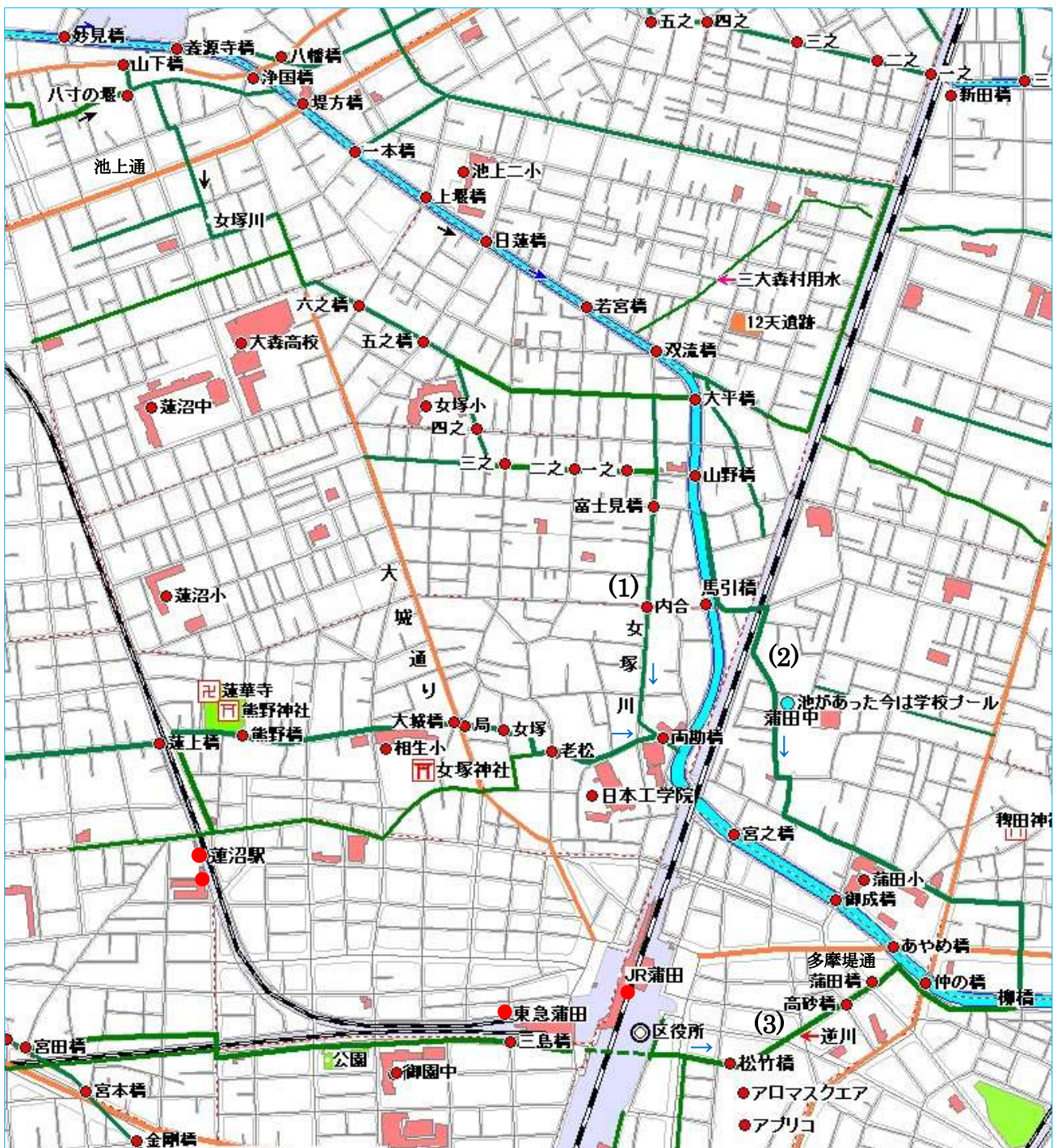


の橋」で呑川に流れていました。また長栄橋下流の堰で、池上地区の水田に流れました。



②は「出世観音」下からの湧水で、現駐車場の「洗い場跡」から「清水坂公園」②を通り、小鳥が水浴びをする公園の小さい池は、前の家からの湧水をサイホンで湧出していて、そこから右側歩道の流れ、「仲之橋」で呑川に合流していました。③は「ヒルズ久が原池」からの流れで、平間街道脇の六郷用水北堀に合流していました。そして「洋服の青山駐車場」は昔は浅い沼で、二国向いの広い道は原っぱで荷馬車の車庫になっていたようで、そこから右側歩道の流れ鶴林橋から呑川に流れていた跡があります。

4. 呑川下流域の流れ



(1) 女塚川・逆川 (六郷用水) の流れ



側の歩道が流れ跡で、日本工学院のキャンパス（旧日本テレビ技術専門学校）を抜けて木枠の土手から呑川に流れ込んでいました。この流れは徳持の六郷用水から相生小学校脇の流れ②と、東急池上線蓮沼駅付近からの御園堀と言われた流れ③と共に日本工学院手前で合流して、呑川に流れていました（下写真）。

(1) 女塚川は池上の六郷用水八寸から分れて池上通を渡り、大森高校の傍から大城通を越えて、女塚小学校の横を流れ、流れ跡がはっきり分かる緑道①から右折して道路左



写真提供 学校法人片柳学園

(2) 呑川左岸の馬引橋から JR 線の下を潜って、蒲田中学を過ぎ、ガードレールの流れ跡を辿り、元菖蒲園があった蒲田小学校の脇④を通り、呑川に流れ込む菖蒲園に関係した流れがありました。

(3) 逆川は、昔の女塚村と御園村②逆川耕地を流れるので逆川堀とも呼称され、1965(昭和 40)年頃まで②で東急多摩川線に沿って流れていました。そして JR 蒲田駅西口から大田区役所の下を流れ、区役所玄関前からアロマスクエアを通り、呑川に流れる、400 年前に張り巡らされた六郷用水の支流です。



込む場所に移され、説明板が設置されました。

アプリコ・アロマスクエアの場所には 1920(大正 9)年～1934(昭和 9)年まで、松竹キネマ蒲田撮影所(約 9000 坪、その後高砂香料工場)があり、正門前には逆川⑥に架かる松竹橋⑤がありました。そこから呑川までの流れの跡が 2014 (平成 26) 年に無電柱化した洒落た逆川通りとなり、そして多摩堤通りに架かっていた「蒲田橋」⑥の親柱が呑川に流れ



呑川最下流部は、地図上の細く濃い青い蛇行流れのように、天神橋手前の北野神社の南側を流れて、蒲田町の東端から北東の方向に蛇行して海に流れていました。洪水対策で 1932(昭和 7)年、夫婦橋下流から約 2.5 ㎞間を新呑川の開削工事を始めて、清水橋下流から羽田の田圃を一直線に東進し、存在していた藤兵衛澤を利用して海老取川に注ぐ、新河川が 1935(昭和 10)年に完成しました。

その後、新呑川と旧呑川が並列して流れていましたが、蛇行している旧呑川は海苔業の廃止や下水道の整備と共に、昭和 30 年代後半から埋立てが始まり、1975(昭和 50)年に現在のような呑川緑道が完成しました。春には桜並木、夏には木陰に細い水の流れも復元して、子供たちの良い遊び場となっています。旧呑川には 2017(平成 29)年までは、船の係留場にもなっていた呑川水門がありました。また夫婦橋下流に災害時、船による物資輸送の防災拠点を兼ねた夫婦橋親水公園があります。



呑川河口(海老取川へ)



旧呑川河口・船の係留場



夫婦橋親水公園

5. 旧呑川の流れ

旧呑川とは元々呑川の本流で、「かんまがり」と言われる急カーブ回りから東に流れ、現在の大森南図書館の南側を流れ、その流れの向きを変えながら今の藤兵衛橋付近から東に流れ東京湾に注いでいました。

江戸時代に書かれた「新編武蔵風土記稿」の中に、元禄 16(1703)年の大地震により流れが変わったと書かれており、「かんまがり」の北側に流れていた「座頭川」に流れ込んで東京湾に注いだ。その流れが呑川となった。この流れこそ呑川の本流であった(右上の地図)。ここにある「座頭川」については歴史の項で詳しく述べることにします。

大正・昭和にかけて現在の城南地区と言われる地域に人口が急増した。その大きな出来事は大正 12(1923)年に起きた関東大震災であります。比較的被害が少なかったことと、JR の京浜東北線、京急の京急本線と穴守線、東急の東横線、目蒲線、池上線など都心へのアクセスが良い交通網の整備などもあり人々が移り住むようになり、森の木は切られ、田畑は埋められ住宅地・工場などに変わっていきました。この事は大地の保水力を奪い、雨が降るとその水のほとんどは川に流れ込み、たびたびに洪水を起こすようになりました。特に台風による被害は増大しました。

呑川の中流・下流地域の大森区・蒲田区の住民はそれぞれの町や東京府・東京市に対し洪水対策を繰り返し陳情していました。その結果、新呑川の開削が決定し、昭和 7(1932)年から開削工事が始まり、昭和 10(1935)年に工事が完成しました。同時に夫婦橋上流から池上養源寺橋までの区間の拡幅工事を予定していましたが、支那事変、太平洋戦争と続く戦争の影響により拡幅工事が中断されたことにより、新呑川の開削だけでは洪水は無くなりませんでした(右下の地図)。

蒲田町史の「面目一新の呑川」の項で、「従来呑川の下流は、神戸橋の下流に於いて、羽田田圃を一直線に東進し、藤兵衛橋に注ぐ新河川を改修(従来呑川は其儘存置)するのである。而して其幅員は二十七メートル二七で、その深さは十四メートル半であるから、希観の一大運河を現出し、可なり大きい船



船が航行するのだ。(中略)故に該工事竣成の暁には、ただに呑川の面目を一新するのみならず、舊蒲田町の景観をも、一変するに至るであろう。」このように書かれています。

戦後の復興が進む中、呑川の拡幅工事も行われるようになり、昭和 40 年代に入ると呑川の氾濫による水害は無くなりました。

上記のような内容を考えると、旧呑川という呼び方は戦後になってからのものだと思います。

この旧呑川は新呑川が開削されるまでは呑川の本流でした。元禄の大地震前後から大森沖での海苔漁業が発展してきました。この流れを変えた呑川の沿岸は海苔漁業の大きな基地となり、また両岸には海苔船が連なって係留され、広い土地にはたくさんの海苔が干されていました。ここで作られた海苔は「大森海苔」というブランド海苔として流通していました。

昭和 20(1945)年 4 月の東京大空襲によって、呑川沿岸を含んだ城南地域は殆どが焼き尽くされました。それでも戦後の復興の中で、この「大森海苔」も復活しました。右上の写真は河口近くの両岸に係留されたノリ舟と竹ヒビ。右中の写真は潮見橋下流付近に広がるノリ干し場。右下の写真はかんまがり近くで新造船の進水式を見守る人々。

戦後の復興が進む中で、保水力のなくなった呑川周辺は湧水の流入は少なくなり、一方家庭からの排水の流入が増大しました。工場排水も流入するなど呑川だけでなく東京の河川の水は汚れ、その結果東京湾の水も汚れていきました。戦後の復興、日本が高度成長時代に向かう中、海は汚れ、東京湾の埋め立て、京浜運河の開削など、大森海苔の養殖現場の環境は次第に悪化していきました。特に昭和 39(1964)年の東京オリンピックの開催に向けた取り組みは東京湾の環境をより悪化させました。このような状況の中、昭和 37(1962)年に海苔業者は「漁業権」を放棄し、翌昭和 38(1963)年春の収穫をもって江戸時代から



旧呑川の河口付近 (撮影年次未詳) 写真提供：大田区立郷土博物館



昭和 38 年 1 月頃の旧呑川 写真撮影：田中守男氏【大田区立郷土博物館】



昭和 32 年新造船初船出「かんまがり」付近の旧呑川 写真提供：松原秀章氏

続いた「大森海苔」も終焉を迎えました。この事がその後の旧呑川の運命を変えました。

戦後近代化を目指す東京都は下水道の普及に力を入れてきました。源流が無くなった中小河川、田畑の利用が無くなった用水路などが埋め立てられ下水道化していきました。自然流下の下水道にとって、河川・用水路は自然の傾斜もあり、土地買収の必要もなく費用も安くできること、周辺住民の「悪臭被害」に対する要請などもあり、蓋掛けが進んでいきました。

海苔漁業が終わった旧呑川は、汚れた水路だけが残され、周辺住民の要請などもあり、徐々に埋め立てられました。

右の写真は「大田区立東蒲中学校・開港 80 周年記念誌」に掲載された昭和 35(1960)年の写真であります。この時代はまだ大森の海苔漁業が行なわれており、海苔船が旧呑川を往来していましたが、この写真によるとすでに一部は暗渠化されていたようです。



写真提供：大田区立東蒲中学校

上記記念誌の同校沿革の中で、東蒲中学校は昭和 33(1958)年 11 月 1 日に現東蒲小学校(大田区東蒲田 1 丁目 18 番)から現在の場所(大田区東蒲田 2 丁目 38 番)に移転してきたもので、「昭和 36(1961)年 11 月、旧呑川埋立地 358 坪払下げ、三角地350坪を購入。」「昭和 41(1966)年 3 月三角地埋立て工事完了」と書かれています。

このように旧呑川は昭和 40 年頃から埋め立てられ、昭和 40 年代の後半に埋立ては完了したものとされます。そしてその後昭和50年代に順次緑地として整備されていきました。桜並木を残し、広い場所には子供の遊具を設置するなど旧呑川緑地として遊歩道に整備されました。以前から植えられていた桜並木は訪れる人々に春の花見を提供していました。こうしてみると旧呑川と呼ばれた期間は、長くても新呑川完成以来の約 40年弱であったと思われる。



一方海苔養殖業者の皆さんは、海苔干し場というかなり広い土地を持っていたので、その土地は、当時日本は「高度経済成長時代」に入っており、工場用地や、この「高度経済成長時代」を支えた地方出身の若い労働者などに住居を提供するアパートなどに転用されました。

海苔漁業が終わって川が埋め立てられた後も、このように日本の高度成長時代を支える土台ともなっていました。同時に桜を含めた木立や花々が植えられ、子供の遊具も作られた遊歩道は周辺住民の憩いの場でもあり、訪れた区民の心を和ませています。遊歩道の中には「旧呑川緑地」のモニュメントが作られ、一部の橋の親柱、産業道路に架かる「川下橋」、羽田道に架かる「呑川橋」が今でも残されています。



春の旧呑川緑道 写真提供：大田観光協会



遊具もある春の呑川緑道 写真提供：大田観光協会



呑川緑道（旧呑川）に残る川下橋（上流側より）



呑川緑道（旧呑川）に残る呑川橋（下流側より）

- 【参考文献】 ○大田区史 ○蒲田町史
 ○新編武蔵風土記稿
 ○海苔のこと 大森のこと 元大森海苔漁業養殖者＋編集委員会編
 ○わが住む町、わが故郷 “その昔を語る” 集い 大田区立大森南図書館 編
 ○大田区の文化財 22集 口承文芸
 ○大田区の文化財 24集 地図で見る大田区(1)
 ○大田区の文化財 24集 地図で見る大田区(2)
- 【写真提供】 ○大田区立郷土博物館
 ○大田観光協会
 ○大田区立東蒲中学校
 ○松原秀章氏(西糀谷在住)

コラム 呑川の川名の由来

呑川そのものは「呑川の歴史」でも触れられているように 10 万年以上前から流れて、そこに徐々に人が入ってきました。

呑川の川名の由来について色々な考えがあります。ただ文献に現れたのは楠原佑介氏の「地名でわかる水害 大國・日本」で、それでは「ノミとはノビの音転ですヨ。台地上を延々と延びて流れる川という意味です」としています。しかし楠原氏は音韻学的にノビがノミに変化することがあるのか、またノミに何故「呑」の字が当てられたかの説明はありません。

また「呑川」のウィキペディア(2017.1.3 現在)では「呑川という名称の語源として、その昔牛が誤って川に落ち水を飲んでしまうことがあったから、などという説がある」としていますが、出典・説明はないです。

そこで改めて「呑川」の川名の由来を考えてみたい。

まず「呑川」という地名の初出の文献は何か。新編武蔵風土記稿(1830 年)にはあるが、それ以前に登場する文献はあるのか。

例えば文化7年(1810)から文化 11 年(1814)に出版されたといわれる野次さん喜多さんの「東海道中膝栗毛」には「大森の麦藁ざいく」の記事は見えるが、呑川は勿論川の存在を思わせる記述は六郷までない。余談だが梅屋敷は登場してない。

大田区史(資料編)地誌類抄録を見たが夫婦橋は散見されるが呑川の記載はない。特に新用水掘定之事の堤方村の稿に呑川の記述があれば良いがない。とすると新編武蔵風土記稿が初出ということになり、これからは想像・空想・妄想しかないだろう。

そこで「呑川」という名称がどこで、いつから言われてきたか。呑川の堤方橋あたりから上流地域は縄文時代、弥生時代には住民が住んでいたが、堤方橋から下流側は女塚遺跡や蒲田小学校付近遺跡など遺跡はあっても、それは祭祀遺跡の可能性が高いといわれている。そうすると住民はほとんどおらず、水の流れを特に意識して呼ぶ必要はなかったのではないか。とすると「呑川」という呼び名がついたのは六郷用水開削後、呑川流域に人が住むようになってきてからと推察される。それは新編武蔵風土記稿で池上村等の上流では深沢流れと呼ばれ、「呑川」は堤方村から下流で呼ばれていたことに符合する。

「呑川のみがわ」の川名の由来について「のみ」を意識し、①呑川の水を飲んでいたのでという飲用水説と、②洪水の時、人や家屋、田畑を呑み込むからという洪水説の二つが以前から言われてきた。

実際、記稿の下袋村の呑川の記事には「又村民朝夕炊爨(スイサン)の料に汲用ゆ」とある。従って飲用水説も考えられないことではないが、漢字辞典によれば「のみ」の同訓には 飲、呑、咽、嚥があり、飲は、湯・水などをのむこと、呑は、物をかまわずにまるのみすること、咽、嚥はのどの意で転じて一口ずつ喉へのみこむこと、とある。とすると呑川は洪水のとき人や家屋等を一気に呑み込むから「呑川」となったということも考えられる。呑舟之魚、呑牛之氣ともいう。すなわち洪水を起こす恐ろしい存在と感じられていたのではないか。いまでこそ呑川の洪水は少なくなったが、太平洋戦争の敗戦直後は毎年のように洪水が起こり、一定の年齢以上のものは呑川というともまず洪水をイメージするという。

飲用説の場合、住民に飲用水を供給してくれると感謝の気持ちがあるが、洪水説の場合は何十年かに一度起こる洪水の恐ろしさのイメージが強い。しかし楠原氏ののび説、またウィキペディア説もあるかもしれない。

しかしどの説にしる断定的なことは言えず、今後の調査でより説得力のある考え、根拠がでることを期待したい。

また「呑川」の発音であるが大田区では普通「ノミガワ」と呼ぶが、「ノミカワ」と呼ぶところもあるかもしれない。そのためか東京都建設局河川部の定めた都内の河川の標記方法では「Nomi-Kawa」としているが、これは勿論流域住民が実際に呼んでいる呼び方であるべきである。

呑川の会

参考書

- ・新編武蔵風土記稿
- ・大田区史(資料編)地誌類抄録 大田区立郷土博物館
- ・大昔の大田区 大田区立郷土博物館 1997.3.21
- ・女塚貝塚(東京都大田区西蒲田四丁目 20 番 15 号所在遺跡の調査) 2000.6
(株)グランイーグル、加藤建設(株)埋蔵文化財調査部
- ・角川 漢和中辞典 貝塚茂樹 藤野岩友 小野忍編 角川書店 1959.4.1
- ・地名でわかる水害大国・日本 楠原佑介 祥伝社 2016.7
- ・ウィキペディア 呑川の項 2017.1.3
- ・河川名板の標記方法の改正について(通知)都建設局河川部 1996.12.10 8 建河防台 03 号

以上